

## 企画展「生きものの名前」

半田 宏伸

当館では3月12日から6月19日にかけて、企画展「生きものの名前」を開催します。

本展示はタイトルの通り、生きものの名前に焦点を当てた企画展示です。

人は、生きものにそれぞれ名前を付けることで種類を識別し、認識の違いを他人と共有しています。生きものの名前の多様さは、生きものの種類の多様さに直結しています。例えば埼玉県内では生きものは15,000種類以上確認されています。つまり県内を見渡すだけでも、それだけの数の「名前」があるということです。そして名前には、その生きものならではの名付けの由来や意味があります。普段、何気なく見ている生きものでも、名付けの由来や意味を知ること、生きものの特徴や辿ってきた学術的な背景など、普段とは違った見え方、面白さを感じることができるかもしれません。

本稿では、本企画展の内容から、導入と展示内容の一端をご紹介します。

まず、当企画展は大きく分けて、

1. 「和名」<sup>わめい</sup>—日本語の名前
2. 「学名」<sup>がくめい</sup>—世界共通の名前
3. 埼玉の地名が入った名前

の3部構成としています。第1部では私たちが慣れ親しんだ名前、「和名」について、身近な生き物を題材に、由来などをご紹介します。続いて第2部は世界共通の名前として用いられる「学名」について、命名のルールや和名と同様に意味や由来についてご紹介します。そして3部目では、埼玉県の名前に由来する名前を持つ生きものについて解説しています。

## 第1部「和名」—日本語の名前

和名とは、私たちが日常で生きものを指すときに使う日本語の名称です。例えば「モンシロチョウ」「ナナホシテントウ」などが当たります。

和名にはそれぞれ名付けの由来や意味があります。わかり易い<sup>やす</sup>ものでは、例えば色や形、生態に<sup>まつ</sup>纏わるものがあります。例えば上記の「ナナホシ

テントウ」を見てみます。テントウムシの仲間は手に乗せると上の方に登っていき、飛んでいきます。この行動が太陽（=お天道様）に向かっていくように見えることからテントウムシ（天道虫）と名づけられています。ナナホシテントウは、背に7つの黒斑があることが特徴なので、この模様を星に見立ててナナホシと付きました。



写真1  
ナナホシテントウ

また、古くから知られている生きものは、慣習的に使われてきた名称を今でも用いる場合が大半です。そのため研究が進歩することで、それまで使ってきた和名が体をなさなくなることもあります。

その一例として「ブッポウソウ」という青緑色の美しい鳥がいます。名前は、鳴き声を「仏法僧」と聞きなしたことに由来します。しかし昭和のころ、この「仏法僧」の声の持ち主はコノハズクというフクロウであることが判明します。しかし、声は違っても慣れ親しんだ「ブッポウソウ」の名前は変わらず、青く美しいこの鳥の和名として使われています。



写真2 左) ブッポウソウ、右) コノハズク

## 第2部「学名」—世界共通の名前

学名は、国際的な命名規約のルールに則って命名される世界共通の名前です。原則としてラテン

語（あるいはギリシャ語）を使って表記します。学名では「種」を、対象の生きものが属する属名と、それに続く種小名の2語を用いる「二名法」で表記しています。加えて他の単語と区別できるように斜体表記します。例えば前述のナナホシテントウの学名は“*Coccinella septempunctata*”と表します。*Coccinella* が属名、*septempunctata* が種小名です。さらにこの学名の命名者名や年代を追記し、*Coccinella septempunctata* Linnaeus, 1758 と書く場合もあります。

また、これらの名前も和名と同様にそれぞれ由来や意味を持っています。ナナホシテントウの場合、*Coccinella* は「真っ赤、緋色」を意味するラテン語の“*coccinus*”を語源としているとされています。*septempunctata* は“*septem-*”が「7」、「*-punctata*」が「斑点」という意味を持つ言葉を組み合わせた単語です。「赤い体に7つの斑点がある」ナナホシテントウにぴったりの学名となるわけです。

日本では生きもののお大半に和名がつけられているので、学名には馴染みがありません。ですが、生きものの中には和名が使われず、学名をカタカナで呼んでいるものもあります。例えば恐竜の仲間では有名なティラノサウルス レックスは学名“*Tyrannosaurus rex*”がそのまま通称になっています。そして当館の代表的な展示物、「パレオパラドキシア タバタイ」もその一つです。学名を“*Paleoparadoxia tabatai*”と書きます。これは、Paleo- が「昔の」という意味の“*Palaios*”を語源とした言葉、*-paradoxia* は「矛盾した」という意味があります。「太古の矛盾」というわけです。*tabatai* は人名に由来します。

このように「学名」には、あまり馴染みはありませんが、実は学名がそのまま呼び名として浸透したという生きものは、化石生物を中心に数多く存在しています。



写真3 パレオパラドキシア  
骨格復元模型

### 第3部「埼玉県の地名がついた名前」

生きもの名前には、地名に関する単語が含まれていることがあります。これはその生きものが発見された場所、あるいは分布する地域に因んでいます。生きもの名前には、北海道を表す「エゾ〇〇」などがよく知られていますが、埼玉県所縁の地名も多数見受けられます。

例えば化石では「チチブクジラ」や「チチブホタテ」、植物では「チチブイワザクラ」「ブコウメマザクラ」、動物では「チチブコウモリ」や「トダセスジゲンゴロウ」などがこれに当たります。これらはまさに埼玉県内で初めて発見されたことに由来します。中には、他の地域から発見例はなく、埼玉県が唯一の産地あるいは生息地となっている生きものもいます。

このように埼玉県所以の名前を持つ生きものは様々な分類群でも見られ、その数は40種類以上になります。それだけ埼玉の地で新しい生きものが発見されてきたということです。こうした名前を通じて、埼玉県が調査研究の舞台となってきたことを窺い知ることができるのです。



写真4 左) チチブイワザクラ、  
右) トダセスジゲンゴロウ

### 終わりに

本企画展では、本稿で紹介した内容をはじめ、ここでは紹介しきれなかった生きもの名前に関する話題を実際の標本とともに展示、解説していますので、皆様ぜひご来館ください。

(はんだ ひろのぶ・学芸員)

